

入選

今考える

世界に誇りを持てる藍染め。しかし、ここまで有名になるには大変な努力や試練があった。まず、藍を語るには、今、穏やかに雄大な流れで、人の心もゆったりとさせてしまう不思議な魅力のある吉野川を知ってもらわなければならない。

以前の吉野川は、今とは違う顔を持っていた。「三大暴れ川」と言われ、大雨や台風のために甚大な被害をもたらし、先人たちを苦しめ続けてきた。何度も試行錯誤を繰り返して、水に強い藍に白羽の矢が刺さり、藍畑作りが始まったそうである。その名残で「藍畑」という地名が現存している。

しかし、藍づくりは一筋縄ではいかず、何度も水害が起こった。しかし、町の有志たちがあきらめず藍づくりを続けてきたからこそ徳島の産業は今に至ってきた。並々ならぬ苦労を積み重ねた結果、川からのプレゼントをもらえたのかもしれない。藍畑農家は今では数えるほどになっているそうだが、徳島が誇る文化なので、私たちも藍染の魅力を発信したり、体験したりすることで、伝統を受け継いでいきたい。

藍もそうだが、今は穏やかな吉野川も、その雄大で美しい姿を保ち続けてほしいと心から願う。吉野川には四季折々の美しい流れや風景が見られ、今では、ほとんど見ることができなくなった鳥類や水生生物、および植物も生息している。その他、夜のシラス漁は、夜の闇の中に幻想的な光のパレードを見ているようで、楽しい気分になれるお勧めのスポットでもある。また、徳島県の名産の一つでもある阿波和紙。これも水がなくては始まらないもので山間部の恩恵を受けたコウゾ・ミツマタ・ガンピを中心に、奈良時代という遠い昔より作り続けられている。途中、西洋化が広まり、製造は衰退したが、この和紙を守り抜いてくれた会社があったおかげで伝統工芸品に指定されている。いつも身近にあるものにたくさん歴史があり、数々の苦労を経て今がある。

徳島市徳島中学校 三年 倉橋 麻友

考えてみれば、徳島に住む私たちは水と共に暮らしていると言っても過言ではないと思う。徳島中心部には眉山と城山が鎮座しており、それらを包み込むように無数の川が流れ四季折々の美しい姿を見せてくれている。まさに「水都徳島」である。

徳島の川は、観光客にもいろんな姿を見せて続けている。美しい川面に多数の魚類が姿をのぞかせ、見る人たちに喜びと癒しを与えてくれている。

新町川を起点とする「ひょうたん島クルーズ」では、オープンカーならぬ「オープン遊覧船」で川を優雅に進み、美しく整備された川岸の公園やヨットハーバーなど、徳島の様々な風景を見ることがができる。ひょうたん島クルーズの途中には、橋の下を潜るエリアがある。頭を下げないとぶつかってしまうようなアトラクションのような楽しさがあるエリアだ。一回乗ると楽しくてまた何回も乗りたくなるようなコースが考えられている。これも、水と緑と人間が共存しているからこそ体験できるものだ。しかし、この美しい風景がずっと続いていく保証はない。私たちは、これからどうやってこの素晴らしい環境を維持していけば良いのか考える必要がある。水は、いつでも簡単に蛇口をひねると出てくるものではない。世界には、水を得ることが難しく、汚れた水ですら飲料水として使っている人々がいる。SDGsの中にも「安全な水とトイレを世界中に」という目標がある。私たち一人一人が行動や意識を少し変えるだけでも守れる水や自然があるのではないだろうか。例えば、手や食器を洗うときやシャワーを浴びるときに水を流したままにしないことや、トイレの大小レバーを使い分けるということは中学生の私でもできることだ。身近なところから水や環境を守っていきたい。